

『パリの息子 高田賢三』

10年以上前の夏休みに、家族旅行でパリに一週間ほど滞在したことがあります。その頃、理由は忘れましたがたいへん円安が進んでいて、惨めな貧乏旅行となりました。1ユーロ180円ほどだったと思います。今は、120円ほどです。フランスパンをかじりながら美術館を廻るような毎日でした。当然家族から不満が出てきます。

「もっとおいしいフランス料理が食べたい」とか「もっと楽しい場所に行きたい」とかいろいろです。「パリの醍醐味はなあ、フランスパンをかじりながら美術館を巡ることやで」と言っても納得しません。しかたなく、家族でキャバレー・ムーランルージュに行きました。たいへん楽しい時間を過ごした最後に、司会者が「どなたか、舞台上と一緒に踊りませんか」と言ったように思います。もちろんフランス語です。

私は喜んで舞台上がっていきました。何を踊ったかは、忘れましたが、フランス女性ダンサーと楽しく踊りました。踊り終わると、拍手があり司会者が「お名前は」と聞いたように思います。もちろんフランス語です。「ケンゾー」と答えると。相手は飛び上がるように喜び「ケンゾーさんトレビアン」と言ってくれました。この時、パリでは「ケンゾー」という名前は特別な名前だったのだと初めて知りました。ちょうど、アメリカでの「イチロー」と一緒です。

10月4日に、世界的服飾デザイナーの高田賢三さんがなくなりました。高田さんも長年参加したパリ・コレクションがちょうど開かれている時期で、パリのファッション業界や文化関係者らに深い悲しみが広がりました。彼らは「東西の文化を融合させファッションの新しいページを開いた」とたたえ、死を悼む声が相次ぎました。

フランスのパシュロ文化相は公式に追悼声明を発表し、「パリで最初に頭角を現わした日本人デザイナー」で「誰にも見分けられるスタイルで、文化の結合が特徴だった」と言及しました。パリのイダルゴ市長はツイッターに「パリは今日、自身が生んだ息子の一人をなくし、その死を悲しむ」と投稿しました。

高田さんが創設したブランド「KENZO (ケンゾー)」を傘下に入れたフランス高級ブランドグループ「モエ・ヘネシー・ルイ・ヴィトン」のベルナール・アルノー会長は「ファッション界に軽やかな詩的感覚と心地よく自由な雰囲気をもたらした。死去を深く悲しんでいる」と表明し、地元メディアは死去を速報し高田さんの功績を称えていました。

高田さんは、古里・姫路に惜しめない愛情を注いで来ました。1989年、姫路市制100周年を記念して姫路城内で自身初の野外ファッションショーを開き、フランス国旗を思わせるドレスや千姫をイメージした純白の花嫁衣装で市民を魅了し、100周年記念を盛り上げました。突然の訃報に悲しみの声広がっています。

